

## 農村における生活環境再整備としての美しいむらづくりの展開

農村環境整備センター 重岡 徹

つい最近までの日本の農村では、貧乏と困窮に悩まされて、「むらづくり」の最大の目標を「貧しさ」からの脱却、「豊かさ」の追求に置くことが多かった。そして農業生産性の向上や生活の利便性の追求を目指して、農村生活環境の整備事業は生産基盤の整備や生活環境の整備を重視して押し進められてきた。この結果、高度経済成長期以降になってようやく農村の生活は貧しさからの脱却を果たし、物質的には豊かさを獲得するようになった。その反面、新しい生活の問題を生じてきた。

新しい農村生活環境の問題とは、農産物や物財の過剰の問題、水質汚濁、大気汚染、騒音などの外からもたらされた公害、行き過ぎた開発や農業・化学肥料の過剰投下などによる自然生態系の破壊、農村構成員の過度の流出、新しい構成要素の農村への進入による古い景観の破壊と不調和の問題である。これらの問題は、貧しさからの脱却・豊かさの追求・利便性の向上の結果生じてきた問題ということができ、農村生活に不健全性を与え、危険を与え、生命を脅かすものであるが、その根底に「醜さ」の形成が指摘されることができ、したがって今からの「むらづくり」の新しい原理として、「醜さ」を克服して「美しさ」追求する「美しいむらづくり」の思想を登場させることが必要であろう。

「美しいむらづくり」の第一歩として、「醜さ」を克服して農村生活環境を整備する必要がある。そしてそれは、これまでの生活環境整備の結果生じてきた新しい矛盾を克服するため、過剰なものを処理し、公害発生源を改善し、公害発生源を改善し、過度の環境改変を抑制し、環境構成要素の調和を図って、農村生活環境の再整備をはかることから始まる。

ついで、その上にたって、「美しいむらづくり」は、健全な地域産業を確立し、清潔で鮮明な生態系を保全し、暖かい人間関係に立脚した秩序ある地域社会を再編し、古いものと新しいものの調和した洗練された地域文化を育成することによって、美しい農村社会の構築を目指して積極的に「美しさ」を創造していく必要がある。

「美しいむらづくり」に取り組む自治体は近年急速に広がってきている。ここでは、「美しいむらづくり」の実態について、1992年の国土庁による「農村地域整備状況調査」のデータから全国的な動向を考察するとともに、「美しいむらづくり特別対策(1992～4年度実施)」を実施した70市町村について行ったアンケート調査結果からも考察する。最初の調査結果からは、「美しいむらづくり」の全国的傾向として公共施設周辺の植生、沿道植生、花壇の設置など見た目の美しさを整備する傾向にあり、また第二のアンケートによれば、市町村のむらづくりの方向性が多様化していることが伺えた。さらに事例として取り上げる佐賀県神埼町仁比山地区では、自動車交通量の増大による交通公害という新しい生活問題の発生が契機となって環境改善を目的とした住民運動が起り、それが美しいむらづくりへと展開してきた過程を検討する。